

県立博物館・美術館、11月1日(木)にいよいよオープンしました。美術館の開館記念展は『沖縄文化の軌跡 1872 2007』展。長らくお待たせしましたが今日から当ブログも再(?)始動します。

安座間安司

美術批評家 / 「美術館問題について大いに語る会」代表

2007年11月18日

このブログにアクセスしている皆様、長いこと当ブログが滞っていることに対しおわび申し上げます。この間、美術館・博物館関係者および指定管理者に指定された「沖縄文化の杜」社(=沖縄タイムス社)共同企業体が、さすがに11月1日(木)のオープン向け、詰めの作業や広報等でひどくナーバスになっていた(!?)こともあり、当ブログが、この時期に至ってまで「美術館問題」について「批判」的スタンスにあたるのが、「美術館の準備作業」を単に邪魔をしているだけかのような印象をもたれることへの危惧や、実際内部でどのようなことが進行しているかなど、十分な情報が得られなかったこともあり、慎重を期して「様子を見守る」という姿勢を保持してきました。

しかし、オープン間近から、実際に私たちが当初から危惧(心配)していたような現場の混乱 たとえば、美術館と博物館、指定管理者間の連携の悪さや、学芸員と作家間の連携の悪さ、さらに指定管理者による指定日以前からの開館向け展示準備の仲介に至る事情など、様々な問題が実際に顕在化しています。

そこで、開館後にみえてきた状況 美術館開館記念展「沖縄文化の軌跡 1872 2007」の様子や博物館の展示コンセプトなどにもできるだけ触れながら、また、指定管理者である沖縄タイムス社の美術館・博物館をめぐる、相変わらずの自社に都合のいいとしか思えない広報の問題点にも触れながら、再度「美術館問題」についての議論を進めていけたらと思っています。

なお、冒頭では、私=安座間安司は、これまでどおり「美術館問題について大いに語る会」代表となっておりますが、この間「大いに語る会」のなかでも、さまざまな立場や意見の相違が出てきており、そうしたことも考慮して、私の言説については、主に「美術批評家」の立場からの批判(批評)ということで今後は展開していきたいと思っています。ご理解いただくようよろしくお願いいたします。

それにしても、なぜ「沖縄文化の軌跡 1872 2007」展なのか？

今年の6月11日の当ブログでも触れたが、県行政における美術館副館長や新しく配属された学芸員の人事のあり方(当初の教育長答弁とは大きく食い違ってきている)への批判に加え、「美術館開館記念展」が「美術館」の企画展であるはずなのに、文学や芸能、音楽など、沖縄の文化全般を対象とした何とも曖昧な企画になっていることについても、これまで何度か疑問を投げかけてきた。というのも、それまでに具体的な情報がないところに、唐突に4回にわたって始められた「開館記念フォーラム」自体が、パネリストの人选も含め、企画主旨があいまいなので、いったい「開館企画展」で何をやろうとしているのかがまったく読めなかったからだ。

ところが、先(6月11日)のブログでも指摘したように、「開館記念フォーラム」の第4回目(3月15日開催)で、なぜか初めてその企画趣旨が明らかにされ、しかも企画当初より「近代以前の琉球処分=1872年から今日=2007年までの歴史と文化全般を外観する」趣旨で進めていたらしいことが判明した。当初は、もしかしたら「沖縄の美術」だけでは「力不足」で体裁が整えられないとの思惑からかとも思っていたが、開館時に出版された同展のカタログを見て、その企画の主旨が、どうやら「琉球処分」以降の沖縄

における " 植民地的状況 " に焦点をあてた「ポストコロニアル」的視点からの「沖縄」をテーマ（問題）にした企画展であるらしいことが初めて見えてきた。

その後の情報により、当の開館記念展に関しても、関係者（カタログ＝テキストの執筆者も含む）の連携がうまくとられておらず、行き当たりばったりで進められているような状況が判明し、そのことが結果的に、企画主旨の「公開」の遅れや開館間近の混乱にいつその拍車をかけている事情が関係者の間からも指摘されるようになってきた（これまでも触れてきたように4回にわたる「開館記念フォーラム」の混乱ぶりが、むしろそのことをよく物語っていたわけであるが、結局それら全てに共通するのは、キュレーション＝責任主体の曖昧さ いったい誰が責任者で、どこが主催なのか？ ということも含めたあり方 に起因するものというしかないようだ）。

本来なら、一つの企画展にしても、2～3年前から担当キュレーターが丹念に調査、検証し、準備するのが一般的な企画運営のあり方だと思うが、県立の美術館レベルの開館記念展としては、端からみても、明らかにその準備（取り組み）の遅れや企画の脆弱さは否めない。しかも、そのわりには、その意義の是非についてはともかく、一気に大風呂敷を広げたかのように「1872年の琉球処分から現代（2007年）まで」の「美術」でもなく「沖縄の文化全般」となっているので、その「広がり」が一層の混乱と負担を招いたのではないかという印象も拭えないものとなっている。

実際、「美術」に限定した作家や作品をみても「基地問題」や「沖縄戦」といった「沖縄の被植民地的状況」を意識したような作品が大半を占めている。そして、逆にそのことが「沖縄の文化全般」という流れに対しても、沖縄の美術の歴史 とりわけ戦後美術 の今日までの流れを見るにしても、あまりにもおおざっぱで中途半端な印象を与えるものになっている（同時に新設された博物館側の「戦後文化」を扱った「常設展示」の内容とだぶっている箇所もあり、見方によっては、そちらの方が体系的に整理されているぶんわかりやすい構成になっている）。

また、カタログ「第4章 複数の沖縄 1995 2007」の各論 として豊見山愛学芸員（以下、人名についてはすべて敬称は略）の「美術に「沖縄ポップ」は存在するか（試論）」に見られるように、戦後間もなく始まった『沖展』や、1995年・96年に開催された『沖縄戦後美術の流れ』展（浦添市美術館、他）に、沖縄戦にまつわる表現や、（ポストコロニアル的視点からと思われる）「感情の吐露」を表現した作品や問題意識がなかったことをやや批判的にあげながら、美術家真喜志勉や宮城明、川平恵造らの比較的「基地問題」や「戦争」を意識したような「ポップ的」作品について触れているが、逆にそうした視点にこだわるあまり、1960年代以降に生まれた作家たちの、90年代を中心に発表されたポップの影響を受けたと思われる一連の作品がごっそり抜け落ちている感は否めない。

他にもその『沖縄戦後美術の流れ シリーズ1・モダニズムの系譜』展（1995）で扱われてきた90年代以降に台頭してきた作家や作品の多くがあまり取り上げられていないのは、当時の沖縄のアートシーンが今日の「前島アートセンター」や県立芸大の若手作家の台頭へと続く流れをみるときに不可欠の時代背景を持っていると思われるのだが、そうした配慮が見られないのも「複数の沖縄」を謳うには少々手落ちではないかと思えた（沖縄の美術シーンでも「ポストコロニアル」的視点が意識されたのは、ごく最近のことである。それはこれから触れる94年の「沖縄県立美術館建設を考えるシンポジウム」の時点でさえ、沖縄の美術を「文化的視点」からみることの必要性が唱えられてはいるが、この論考でも取り上げている仲里効による戦後美術の「ポストコロニアル」的視点からの「読み直し」以前の段階では、そうした問題意識が仲里自身にさえ明確に意識されていたかどうかは疑わしいところだ）。

当の、展覧会そのものに限ってみても、展示の構成全体（特に導線＝順路）が基本的にマズイので（このことは県外から見に来た「美術関係者」からもつとに指摘されたことだが）、企画展の主旨を辿るのさえ実際には困難なものになっている。

具体的に示せば、1階入り口コーナーの照屋勇賢＋大山健治のコラボ作品「here goes これからだ」と

正面の島袋道浩作品「あたまにものをのせるのはかっこわるいことか？」がいきなり「第5章 海外の沖縄アーティスト 1899 2007」に組み込まれており、その左手に始まる企画展示室1が、「第4章 複数の沖縄 1995 2007」のコーナーになっている。そして、その奥の企画展示室2が「第3章 自画像を求めて 1972 1995」で、そこから戻って中2階に阪田清子のインスタレーション作品（「第4章 複数の沖縄」）があり、3階あがってすぐのコレクションギャラリー2が「第2章 独立と帰属 1945 1972」のコーナーになっている。しかも、この「第2章 独立と帰属」も年代が新しい「米軍統治下の沖縄 アメリカへの抵抗と憧れ」のコーナーが先に来て、「ニシムイ アーティスト・ヴィレッジの誕生と消滅」の古い方が後に来るので、やはり流れが読みにくい。

さらにその奥のコレクションギャラリー3が「第1章 戦前期 異文化遭遇から同化へ 1872 1945」で、そこから2階に降りたコレクションギャラリー1では、「沖縄の写真」と題して岡本太郎から東松照明など、日本「本土」作家から捉えられた「沖縄の写真」の展示コーナー（戦後初期から現代まで）になっている。さらにそこから再度下って1階の離れにある「県民ギャラリー 1,2,3 室」において「第5章 海外の沖縄アーティスト 1899 2007」が別様に展開されているといった具合だ（この導線＝順路の複雑さはカタログに掲載されている翁長直樹主管学芸員による「はじめに」の「この展覧会は沖縄の近代以降の文化に垂直に降りつつも、現在から過去を問う展覧会とする」という企画主旨を意識したものだが、そのことが返って「混乱」を招いている感は否めず、その主旨を「理解」しながら見ている人が関係者以外にどれだけいるのか疑問である）。

私自身、実感として感じたのは、カタログを併用しないと企画自体の主旨や流れがよく理解できないし、年代を整理しながら辿るにも戸惑うというものだ。しかも、カタログ自体初日のオープンに間に合わず、オープニングセレモニーの来客用しか当初は準備できなかったようなので、初日以降カタログを購入できなかった人に、果たしてこの企画展の主旨が、どの程度「理解」できたかはやはり疑問である。

加えてカタログの内容も、美術から写真や映像、音楽、建築、文学、書道、移民問題、表象文化（？）、思想（？）などと多岐にわたっており、執筆者も大半が「ポストコロニアル」的視点を意識しているとは言え、必ずしも全員が企画展の主旨（問題意識）を共有しているようでもないので、テキストとしても、内容に硬軟・偏向があり、それなりに注意深く（気を使って）読まないで、全体像がうまく結ばないという印象を与えている（何よりもカタログ自体が分厚いので、それらを読みこなすのにまず手間と時間がかかる。また、値段（¥ 3,000）が高いのも気になる）。

結果として全体的に中途半端感は否めず、特に今回は写真や映像関係の論評（仲里、鈴木）に加え、思想や文学関係の論評が増えているので、イデオロギー的に偏向している感も否めない。

ここで問題にしたいことは、「それにしても、なぜ「沖縄文化の軌跡 1872 2007」展なのか？」ということだ。これも、当の美術館側（関係者）から明確な説明（情報）もないので、はっきりしたことは分からないが、推測するに、学芸員主管（当企画展の責任学芸員）である翁長直樹の「問題意識」を反映したものであると同時に、カタログを制作した沖縄タイムス社 しつこくくり返すが、後に指定管理者に指定された といっしょにそのテキスト制作にかかわっていたらしい『EGDE』編集長で映像評論家の仲里効の影響力が大きいのではないかという印象だ。

というのも、そもそも美術館のこけら落としともいえる開館記念展に、「文化」というキーワードが導入された背景には、先にも少し触れたが、当の県立美術館建設やそのあり方に少なくない影響を及ぼした

1994年2月の、在野の美術関係者や文化人等を中心に開催された「沖縄県立美術館建設を考えるシンポジウム」報告書における「シンポジウムの企画主旨」の、仲里効による次のような文言（言説）が、今企画展においても少なからぬ影響を与えたのではないかと思うからだ。少し長くなるが、私が気になっているその「シンポジウムの企画主旨」の文言箇所を引用してみよう（当ブログにも、すでにその文言は引用掲載されている）。

「戦後 48 年目（1993 年）にして初めて動き出した（県行政による）美術館構想には、沖縄の美術表現の歴史と現在、すでに造られている既存の美術館や関連する施設が抱える問題性、どのようなポリシーで運営していくのか、つくることと視ることを媒介する空間思想、建築とのリンケージ、そして〈いま〉〈ここに〉美術館を造ることの意味と価値など、解決しなければならない様々な問題があるように思われます。

このことは、個別美術ジャンルの枠内にとどまらず、沖縄の文化のオリジナルティーと世界へ開かれた共時性が試されているということでもあります。新しい世紀の扉を開く年にスタートする（当初は 2000 年に開館予定であった＝安座間補足）美術館のハードとソフトには、少なくともこうした問題をクリアした内実がなければならないのではないのでしょうか。

つまり、美術館建設は沖縄の〈文化問題〉でもあるという意味でもあります。このことの徹底的な自覚が必要とされます。そうでなければ、47 番目に造られた美術館というだけの凡庸さを演じることになりかねません」

この文言には、特に仲里の「署名」が入っているわけでもないし、彼の思い入れだけによるものとも言い切れないが、ここでは、当時の関係者からの発言や情報に頼って判断している。実際、11 月 3 日（土）に美術館との共催で行われた写真家比嘉豊光等を中心（主催）とした『写真 0 年 沖縄』展における「シンポジウム 2 沖縄表象の現在」で、仲里は、わざわざシンポジウムの演題から迂回することになるかもしれないと言いながら、上に引用した「美術館問題」に対する「文言」とその〈文化〉をめぐる問題意識について（再度）触れながら、ジャン・リュック・ナンシーの「無為の共同体」の可能性を沖縄に当てはめるような発言や、『沖展』の（共同体的）歴史的役割の再評価めいた発言をしている。

さらに言えば、同展カタログで仲里は、その『沖展』を含め戦後の沖縄の美術界でイニシアティブをとった美術家の一人である安谷屋正義（1967 年に死去）が、第 1 回沖縄タイムス芸術選賞を受賞した際に、沖縄タイムスから出版されている季刊『新沖縄文学 第 5 号』（1965 年春季号）での「芸術選賞特集 沖縄画壇の展望とその将来」という安谷屋の「評論」について触れながら、「私は安谷屋正義の陰影を、植民地における文化表象の審級の内に読み直してみたい」として、「沖縄戦後美術の流れは、安谷屋が言った「日本の一地方として規定づけられるには、余りにも複雑」な、植民地ゆえの表出の問題と作家たちの葛藤を刻み込んでいた」と自らの問題意識（ポストコロニアル的視点）に引き寄せるように「読み直して」いる（「沖縄文化の軌跡 1872 2007」カタログ「第 2 章 独立と帰属 1945 1972 概観～植民地の文化政治と表象のアポリア～」 p-101-～p-102-）。

この安谷屋正義の「評論」に対する「読み直し」の是非については、肝心な点でもあるので後でまた取り上げたいが、仲里のこの「読み直し」は、確かに興味深い視点を私たちに投げかけていると思う。しかしここでは、同企画展への「ポストコロニアル」的視点の導入が、そこでも仲里によって明確に示唆されているという「印象」をとりあえず指摘しておくにとどめておきたい（こうした私の「勘ぐり」に対し、当人は相変わらず（？）曖昧な返答しかしないので、つまり明確な否定もしないので、この企画展のコンセプトに彼がどの程度関わっているのかは今もってよく分からないところもあるが）。

しかし、なぜ、そうしたことにこだわるかと言えば、要は、そうしたコンセプトが、結果的にその広がりや焦点が曖昧であるがゆえに、企画展としてはその主旨が「空回り」している印象が否めないということをとおりあえず指摘したいがためである。その点については学芸員主管である翁長直樹によるカタログの「序 展覧会について」も同様で、（あるいはそれ以上に）曖昧な表現で歯切れが悪い印象は否めない。

たとえば、その「はじめに」では、「この展覧会は沖縄の近代以降の文化に垂直に降りつつも、現在から過去を問う展覧会とする。自明な事象を再度検証しつつ、沖縄文化とは何か、沖縄の表現とは何かを問う展覧会としたい」とある。しかし、展覧会それ自体をみても、カタログをみても、「沖縄の近代以降現代までの文化全般を扱う展覧会」（「おわりに」より）というわりには、先に触れたように、仲里を始めとした、大半の論客たちの「論評」が、「ポストコロニアル」的な思想的問題を意識したものとなっており、とうて

い「沖縄の文化全般」というには、その試みの是非はともかく、やはりイデオロギー的に偏っている印象は否めない。

しかも、そうした論客たちの「言説」と出品している作家や作品（あるいは資料）の内容にも「問題意識」の"質的"隔たりが感じられるため、翁長が期待を込めて述べるような「それぞれのジャンルに現れる多面的な沖縄を、文化という枠組みの中で再度位置付け直す画期的な試み」とは到底思えないし（「試み」という点だけにしぼれば、そういう評価もこじつけ可能かもしれないが）、むしろ中途半端な雑然とした印象を与えるものになっている。

また、そうした印象と関連すると思うが、県外から来た"美術関係者"の多くが、展覧会の構成のマズサを指摘しつつも、個々の作品には必ずしも「テーマ」とは関係のない「面白さ」を見ていたのが「印象的」だった。そのことはカタログの執筆者たちの、個々のテキストにおける「それぞれの沖縄観」の展開の「思い入れ」にも如実に現れているように思われる。つまり、それぞれの執筆者は自らの「問題意識」から担当分野を誠実に描いていると思われるが、そして実際、仲里効の「論評」をはじめ、個々の「論評」にはレベルの高い優れたものがあり、触発されるところも大きい。ここでも全体を導く"導線=連携"がうまく形成（共有）されていないため、「沖縄の文化という枠組みでの再位置付けの試み（翁長）」という視点からすると、必ずしも成功しているとは思えないからだ。

沖縄タイムス共同体ともいうべき「思想的共同体」の弊害!?

これまでも当ブログで指摘（批判）してきたように、今回の「美術館問題」でもっとも大きな争点のひとつに「指定管理者」の（というより「民間企業」の）導入ありきという「問題」があった。そして、その指定管理者に「沖縄でもっとも権威ある総合美術展である『沖展』」を運営する沖縄タイムスと、その子会社である「沖縄文化の杜」社の共同企業体が指定されてきたことは、これまでも機会あるごとに述べてきたとおりである。

そして6月11日の当ブログ『「県立博物館・美術館」指定管理者に沖縄タイムス共同企業体が（予定通り!?)決定！ これでいいのか県立の美術館？ 館長人事、副館長人事もやっぱりおかしいぞ』に、「よくも悪くも戦後の沖縄の「思想」状況を牽引してきた新聞社を中心としたマスコミが、これまでみてきたような「おかしな」方向に「かじ取り」をしている（そう見えてしまう）ようでは、沖縄の思想的貧困さへの憂いは増々大きくなっていく気がしてならない」というコメントを私自身書いたが、なぜか、当のマスコミ自体がそうした「おかしさ」を認識・自覚しているにも関わらず、私が日頃から信頼しているような（仲里のような）沖縄の「文化人」や「知識人」でさえも、今回の「美術館・博物館問題」については何らの「批判的コメント」を出さないのが不思議でならなかった。私が知っている限りでは、わずかに作家の目取真俊が「館長人事」に対し批判的コメントを寄せたくらいである。

特に昨年末に県議会で指定管理者制度の導入を含む「方針案」が与党による強行採決ともいうべき形で決定した後の「沖縄文化の杜」共同企業体指定に至る流れの中で、これまで反対や抗議の姿勢をとってきた多くの美術関係者までが「せっかく出来た美術館なのだから、もうあれこれ批判するのは止めて、今度はみんなでもっと良くする方向にもっていこう」と、手のひらを返したような姿勢に変わってきている。関係者の胸中には「複雑な思い」があるのかもしれないが、私自身はそうした「変わり身の早さ」にも正直戸惑いを覚えている。というのも、いまだに多くの「問題」を抱えたままだし、県行政や当の沖縄タイムスをはじめとしたマスコミは、そうした「問題」などまるでなかったかのように、やるべきチェックを怠っているようにもみえるからだ。当然、それは自らが行政の「下請け=指定管理者」になることで生じた沖縄タイムスのマスコミとしての中途半端な立ち位置にも関わっていると思われる（これを書いている11月16日（琉球新報）、17日（沖縄タイムス）両日、県が美術館の開館後の展覧会計画について専門的な視点から助言する

ため 2005 年に設置した「展示企画アドバイザー会議」（会長・塩田純一東京都庭園美術館副館長）が、ここ 2 年間（2006 年、2007 年）1 回の開催も行われないうまま、「設置当初の目的と実際の美術館運営形態（＝館長人事のあり方や指定管理者の導入による）が著しく変わり会議の存在意義がなくなった」として、11 月 15 日の第 4 回会議にて「会議自体を解散することに決めた」と報道されている。当然、委員からは会議で出た意見を反映しないまま解散した県の方針に対して怒りや失望の声が噴出したとあるが、「アドバイザー会議が解散したことに、県の展覧会計画について第三者的な立場から検討・助言を行う評価機関はなくなるようになった」（沖縄タイムス）にもかかわらず、それに代わるような機関を設置するかどうかもこれから検討するという。これでは「現場を知る人間からは考えられない決着の仕方」（南島宏熊本市現代美術館館長）と県の姿勢に疑問が出るのは当然だろうし、「行政の怠慢、責任のなさの表れ。県は委員だけでなく、県民への説明責任を果たしていない」（小松崎拓男金沢美術工芸大学教授）と批判が出るのも当然だろう（琉球新報）。この件については、また別の機会に再度触れたいと思うが、こうした問題は、今後企画展の大部分を担当すると言われている指定管理者の「沖縄文化の杜」（＝沖縄タイムス）共同企業体にとっても見過ごすことのできない問題であるはずだ）。

しかし、こういうことを言っていると、最近では「安座間、お前はいつまで批判ばかりしているのだ。けしからん」と逆に批判されたりするのだからまったく疲れてしまう（実際、先の『写真 0 年 沖縄』展のシンポジウム（美術館 3 階講堂）で、「沖縄表象の現在」のテーマに絡めながら、最近の沖縄タイムスを中心とした県内マスコミにおける「美術館・博物館」の報道のあり方について批判的意見を述べたら、どうも多くの人からひんしゆくを買ったらしく、その後の懇親会で、「沖縄文化の杜」共同企業体の職員や沖縄タイムス関係者（元は同じなのだが）や、仲里やその他美術関係者からも批判を受けたり口論になってしまい、結果的に私 1 人が浮いてしまったような経験をしたばかりだ。こう言うと「卑屈になっている」と言われそうだが 実際言われるのだが、たぶん端からみても私 1 人が浮いている＝批判されているように見えたことだろう。私もそうとう腹が立ったので言いたいことはきちんと反論させてもらったが）。

そもそも「彼等」の多くが言っている「これからはみんなで美術館を良くしていこう」というときの「みんな」と「良くしていく」という言葉に、私はどうしても引っかかってしまう。ここで言われている「みんな」と「美術館を良くする」というのが、果たして「みんな」に共有されているものなのか（共有できるものなのか）疑問に思っているからだ。そして若干自己弁護させてもらえば、「批判」することは「美術館を良くすることにはならない」とも言えないと思うし、だからこそ「アドバイザー会議」のような機関が必要とされているのではないのか？

こうした「変わり身の早さ（という印象）」は、94 年に浦添市美術館で開かれた『沖縄戦後美術の流れ～part1 モダニズムの系譜～』展や、沖縄ではあまり知られていないが、96 年に沖縄も巻き込んで開催された大掛かりな美術イベント『アトピックサイト』（東京都主催）というイベントをめぐる「総括」のあり方にも通ずるものがあると感じている。どちらも、多くの問題を抱えていたはずなのに、いつのまにか「総括＝批判」がきちんとなされないまま曖昧にすごされたので、いまだに何が問題で、何が教訓として生かされたのかよく分からないまま歴史の 1 ページに「権威主義的」に書き込まれたままである（その 3 つのイベントに翁長直樹学芸員や前田比呂也学芸員が関わっていることもこの際だから一応指摘しておこう）。

『アトピックサイト』については、沖縄の「ポストコロニアル」的問題を扱ったことで『美術手帳』（1996 年 10 月号）でも特集が組まれるほど話題（というより問題）になったのだが、今回のカタログには、そのことに対する記述も見当たらない（筆者が見落としていなければだが）。

私はこうしたところにも、相変わらずの「共同体的なれあい」や「しがらみ」と表現される類いの体質めいたものを感じている。そしてそれは、沖縄タイムスの創始者である豊平良顕や新川明、川満信一といった、今日なお思想的影響力の強い「思想家」たちを輩出した沖縄タイムスを中心としたような「思想的共同体みたいなもの」にさえ、構造的に根強く機能しているのをあらためて感じている。

仲里効による安谷屋正義「批評」の「読み直し」が触れていないもの

先に、安谷屋正義の「評論」に対する仲里の「読み直し」の是非について後で取り上げたいと書いたが、ここでそのことについて触れておきたいと思う。

確かに仲里が拾い上げた安谷屋正義の批評的言説における「ポストコロニアル」的視点からの「読み直し」は、現在の沖縄を取り巻く政治的状况からみても興味深いものを私たちに投げかけていると思う（実際、今回の展覧会カタログにしても、「屋台骨」ともいべき「芯」を与えているのは、結局仲里論考ではないかと思う程だ）。しかし、安谷屋のその評論「沖縄画壇の展望とその将来」は、仲里が指摘した箇所以降は、意外と凡庸な沖縄画壇論（というより、安谷屋とともに同じく芸術選賞に選ばれた、大嶺政寛、大城皓也、玉那覇正吉、安次嶺金正といった今では半ば伝説化している沖縄画壇の歴史的重鎮たちの個々の作家論という体裁）になっており、そこに全面的に「仲里的な読み直し」の可能性を当てはめるのも少し無理があるように思う。

確かに安谷屋は、その中で「方言札といった刑罰」を例にあげながら、「沖縄人自ら後進を意識し、辺境と観念せざるを得ないような歴史的強制を永い年代に渡って受けてきた」として「日本の一地方として規定づけられるには、余りにも複雑」な、植民地ゆへの表出の問題と作家たちの葛藤（仲里）について具体的に述べている。しかし、同時に彼は「沖縄では批評活動が育たないと、よく言われる」とか、『沖展』の変わらぬ「沈滞気分」についても指摘している。

仲里は先のシンポジウムで『沖展』の役割について評価するような発言しかしていないが（もちろん批判的視点も持っているとは思いますが）、現在の『沖展』は以前にも私自身指摘したように、年々「ポピュリズム」的傾向を強めてきているし、それが事業としての収益のあり方とも直結していることは沖縄の美術関係者なら誰でも知っていることだ（出品者数の増加＝出品料収益の増加であり、入選者の増加が地縁血縁の強い沖縄では入場者数の増加＝入場料収益の増加にも直結する）。しかし『沖展』の会員自身さえ自戒して述べているように、質的なレベル低下（アマチュア化）も年々進行している感は否めない。

私自身は安谷屋とも違って（時代状況がまったく異なるとも言えるので特に強調するつもりもないが）『沖展』には、ほとんど期待もしていないが、その『沖展』人気（それも結局は沖縄タイムスという当該メディア自身が作り上げたものとも言えるのだが）にあぐらをかくようなマスコミ企業が、県立の美術館の指定管理者になったのだから、事態は予想以上に深刻と言わねばならないと思っている。しかも、今回のように「美術館問題」という形で社会問題化しなければ、そうした「深刻さ」にも気付かずに過ごしていたのではないと思われるような節さえある。しかし、実際に、具体的運営に関わるようになった今、どのような隠れた「使命感」があって指定管理者に公募したのかは私には分からないが、初めてその厳しい現実＝見通しの甘さに直面して危機感を強めているというのが実情ではないだろうか。

卑屈で申し訳ないが...

安谷屋は先の「評論」で、当時の（安谷屋より）「若い世代のグループ活動」に触れながら、「この人たちが、芸術活動を画壇的地位の確保や、名誉心などに支配されず、全く自由で純粋な立場において求めようと努力していることは美しいと思う」と述べながら（そのことも私からすれば疑わしいことだが）、同時に

「彼等の抱く、沖縄に対する現実感や抵抗的姿勢が、それぞれの意識の中でももっと明瞭化される必要があるように思う」として「詰問（批評）された場合、言わく言い難しでは若い世代が、よく問題として取り上げる、先輩たちの情緒的姿勢から一步もでていないことになる」と述べている。

つまりここでは、仲里が「読み直した」ように、「日本の一地方として規定づけられるには、余りにも複雑な沖縄（安谷屋）」という、「植民地ゆえの表出の問題と作家たちの葛藤（仲里）」について考慮しながらも、仲里が触れていない、相変わらずの「共同体」特有のなれ合い的「沈滞気分」（「歯に衣着せない素直な批判を嫌がる雰囲気（安谷屋）」、「批評活動が育たない（安谷屋）」環境からの脱却をも唱えているのである（それはまた、仲里が言う「47番目に造られた美術館というだけの凡庸さを演じることになりかねない」状況からの脱却ということにもつながると思うのだが、現状は、むしろこれまで述べてきたように、「沈滞」から抜け出すには難しい状況にあると言うしかないものだ）。

むしろこうした構図は、少なくとも美術の状況に照らしてみれば、現在でもほとんど変わっていないし、事態は、増々「はっきり」ものを言うことが難しい状況が進行している。私自身、自戒も込めて言わなければならないが、そうした状況からの「脱却」の困難さを相変わらず痛感しているし、むしろ、先の『写真0年 沖縄』展での懇親会での出来事がそうした困難 ひとすら疲れるだけだが を端的に、具体的に示していると思っている。そして最近では、卑屈で申し訳ないが、そんな自身の姿を「みっともない」と思いつつ、そうしたことにエネルギーを費やすことに「アホらしさ」さえ感じているというのが正直なところだ。

とりあえず「成りゆきの」に関わった「美術批評」だが、ここに至って、どこまでこうしたことを続けていけるか、能力的にも、気力的にも自信もなければ、特に責任感も最近は感じていない。それでも、とりあえず気力が続く限りは、惰性的にでもこれまでの姿勢でやっていくしかないと思っているくらいだ。

次回は、美術家照屋勇賢の作品『結い You-I』の評価をめぐる「批評（批判）」と、沖縄タイムスによる美術家「岡本光博バッシング」についての「批判」を展開したいと思う。